

論理学に関する無理解のサンプルについて 68 の指摘

2006 年 8 月 20 日 三浦俊彦

以下は、石飛道子著『ブッダ論理学 五つの難問』（講談社）についての、初歩レベルでの指摘です。

現代論理学への無理解というだけでなく、端的に、非論理的な作文のサンプルとして、素朴なわかりやすい例と言えます。

論理教育の専門家のかたにとっては、理想的な教材となることでしょう。

なお、ところどころで担当編集者への批判も書いてしまいました。著者が真面目に書いた本であればあるほど、明らかな矛盾や混乱について制作レベルでチェックが働かないと、向学心ある読者の福利に深刻な影響が及ぶことに鑑み、あえて一言させていただいた次第です。

『ブッダ論理学』の記述内容の症状

標準論理学の「ならば」を日常言語に近づけて変革する試みは、因果関係や内容の関連や時制を考慮に入れた関連論理学や様相論理学で何通りも成されており（関連含意、厳密含意、その他）、いまや、よほど革新的なことを語らないと新味がない。

本書は、「現代論理学を超える論理学」を掲げたわりには、相変わらず因果や時間など、現代論理学自身がすでに俎上に載せて反省している事柄だけを取り上げており、しかも形式化が成されていないので、魅力に乏しい。加えて、多くの根本的間違いや、言葉の曖昧さを含んでいる。

私自身の著書への言及も含むので好意的に読み始めた本であるが、結果として全面否定のケチョンケチョンをなさねばならない羽目になった。よほどのことだと思っていたきたい。

以下、68 項目を列記します。（上部構造レベルを含めると多くなりすぎるため、省略します）。

.....
1 「命題論理学には ができない」ことを示して、「現代論理学には ができない」へとスライドしている。現代論理学のほんの序の口に過ぎない命題論理学をもって現代論理学の全貌であるかのような、間違った印象を読者に与えている。【不当な一般化の誤謬】。

2 「命題論理では因果関係は扱わない。したがって、現代論理学で因果関係は扱えない」という推論は、「算数で無理数は習わない。したがって、現代数学で三角測量は扱えない」と同様の誤謬推論である。【合成の誤謬】。

3 命題論理学にできないとされている時間の前後関係など、現代論理学の教科書に挙げられている陳腐な例に過ぎない。新しい例を挙げる工夫がない。

4 しかもそれらの例は「できない」例ではなく、命題論理学は日常言語をそのまま記号化することを目的としない、という例として、現代論理学の教科書は説明しているはずである。命題論理学の目的を歪曲したうえで批判している。【わら人形論法】。

5 論理学にとって基本的な「抽象」の方法が理解されていない。命題論理学は、「急がば回れ」のスタートラインに過ぎず、日常言語とかけ離れるのは当然である。

6 時間関係のような陳腐な例を「現代論理学の欠陥」であるかのように言い立てるのが滑稽である。本当に批判したいなら、「回ってやっと着いた」ゴールに近いとされるモンタギュー文法などの「形式意味論」を批判せねばならない。その批判が命題論理を相手にしてできたとするのは誇大妄想か詐術。【わら人形論法】。

7 真理表に穴があるというのは16通りのうち一箇所だけだとしている。日常言語に対応しないという意味では、16通りすべてが穴であるはず。【根拠なき特別視】。

8 「決して誰も口にしない秘められたその真理表」という言い方を担当編集者が見過ごしているのは咎められるべし。現に真理表で表現できているものを、論理学者の「誰も口にしな」かったことはありえないとは常識でわかるはず。論理学者が真理表を作ったのだから。【自己矛盾】。

9 真理表6が単なる必要条件であることを述べていない。(p.41で、「演繹論理学の枠内に限る」としていることに注意)

10 接続詞がなくてもそれに対応する事柄はいくらでも語れるのに(日常言語でも数学言語でも考えてみよ)、なぜか語れないとしている。ここを見逃しているのも担当編集者の怠慢。【簡単な類推の不足】。

11 と並んで があるのに、接続詞がないと言っている。【事実の誤り】。

12 を知らなかったことは恥ではない。しかし、事柄の性質上、真理表6にあたる接続詞はあちこちでマイナーな記号が使われていそうであることくらい、予想できなければならない(現に三浦も、『論理学入門』p.29で真理表6に \forall という結合子を仮に当てた)。なのに、「接続詞はない」と断定しているのは、センスが悪い。接続詞の目的がわかっていない証拠。【勘の鈍さ】

13 の存在の有無はトリビアであることがわかっていない。(三浦は、『論理学入門』p.29で、 \forall という結合子はとくに必要ない、と書いた)。

14 p.197には読者を誤らせる記述あり。「一切」を語るには、 \forall と否定の六つが必要であるかのような暗示。実際は、任意の接続詞一種と否定とがあれば、一切の真理表は供給できる。さらに言えば、シェーファー関数といわれる接続詞を用いれば、否定も必要なく、すべての真理表を網羅することができる。【事実の誤り】。

15 日常言語を追認することが論理学の目的だと思い込んでいる。人間の直観を騙す日常言語の改革をも論理学は担っているのに。【自然主義の誤謬】。

16 \forall は真理関数だと明示しておきながら、いつのまにか真理関数でないことになっている(らしい)。【多義性の誤謬】。

17 真理関数が時間を語らないことは定義上始めからわかっているので、批判対象にはできないはず。【論点先取】。

- 18 批判したい場合は、様相演算子や時制演算子など、時間を語れると論理学自身が主張している装置を相手にすべきである。【わら人形論法】。
- 19 「真理表」という概念の意味を理解していない。または、定義を勝手に変えている。【多義性の誤謬】。
- 20 *の意味を自分で途中変更している。【多義性の誤謬、無定義の誤謬】。
- 21 に時間関係を加味すれば因果関係になると勘違いしている(らしい。明確に書いてないので読者には何のことだかわからない)。【ポストホックの誤謬】。
- 22 「因果関係」のような文脈相対的な複合概念を、一網打尽に出来るかのような錯覚に陥っている。【単純化の誤謬】。
- 23 『ブッダ論理学』を好意的に読もうとしている読者にすら伝わらない混乱した叙述が全般になされている。たとえば、命題定項と、命題型と、命題変項との区別ができていない。【曖昧な記述】。
- 24 命題型として捉える「雲があるとき雨がある」と同じ真理表の適用をした場合、p.31の(A)「サミッディは沐浴し、そして、托鉢に行った」など、ほとんどの「そして文」「または文」は偽になってしまう。【ダブルスタンダード】。
- 25 の混同ゆえ、ブッダの公式は、一回限りの出来事や、少数回しか発生しない出来事については、原因の発見に無力であるばかりか、反復可能な出来事の理解にも使えない。
- 26 したがって、最も重要な宇宙全体の誕生にまつわる因果や、一回的な「私」の主観性を扱えないばかりか、普遍法則をも扱えない。
- 27 含意(と)を特別扱いし、真理関数の統一的理解ができていない。【アドホックな議論】。
- 28 との対称性をすら理解せず、に特権性を認めている。
- 29 原因を発見できると称しながら、特定法が書かれていない。【羊頭狗肉】。
- 30 必要条件にも原因でないものがある。雲と雨の因果関係と、雲影と雨、煙と焼死の非因果関係を区別する方法が一つも書かれていない。【ポストホックの誤謬】。
- 31 必要条件でなくても原因となるものがある。風邪と咳、事故と死、勤勉と出世など。これらが扱えないようでは、因果論として致命的である。【不当な排除】。
- 32 事例に頻出する雲と雨の関係は、厳密にいうと因果関係ではないことに触れていない。
- 33 「時間」や「因果関係」は基本概念ではなく、もっと基本的な概念に還元できる可能性に対応できていない。
- 34 pp.44-5「輪廻」や「業」を現代論理学は話題にできないとウソを述べている。【事実の誤り】。
- 35 現代論理学が形而上学を捨てているとウソを述べている。【事実の誤り】。
- 36 p.44の「現代論理学では、「取り扱う文は、誰もがいちおう認めている事柄を述べる場合にかぎる」という制約がある」と、p.45の2～3行目「語る内容にはこだわらない」とが矛盾している(ちなみに、どちらも間違い)。このような見え透いた言葉上の矛盾を見逃している点で、担当編集者が厳しく責められねばなるまい。【自己矛盾】。
- 37 命題論理学で扱う文は、真偽がわからなくてもよいし、意味不明であってすらよい

ことを理解していない。著者は、構成的ジレンマ、背理法などを忘れていたとみえる。
【事実の誤り】。

38 標準論理学では、疑問文や命令文が排除され、平叙文でも特殊な自己言及のような真理値を与えられない文も排除されるという意味で「語る内容にはこだわ」っているのに、こだわらないというウソを述べている。【事実の誤り】。

39 「現代論理学の専門家」として野矢茂樹とか私が挙げられているが、これは勘違い。野矢さんも私も、論理学を使って哲学をやっているだけ。ちょうど、物理学者を「数学の専門家」と呼んだり、小説家を「タイピスト」と呼んだりするようなもの。論理学の専門家というのは、ちゃんといます。「論理学(者)とは何か」の認識程度を示す例として、案外深刻な勘違いかも。【事実の誤り】。

40 pp38-9 これは単なる挙例で、細かいところだが 「偽と確定できないなら、真」という可能性のみ取り上げ、「真と確定できないなら、偽」という可能性は無視している。【一方的な二分法】。

41 p.30「命題論理学という立場」という言葉からわかるように、命題論理学を一種の仮説であると勘違いしている。【カテゴリーミステイク】。

42 現代論理学をダシに『方便心論』を演じようとしたもくろみが、現代論理学の根本的無理解によって破綻している。【砂上の楼閣】。

43 「西洋論理学は「有」の立場に立っている」といった、陳腐な決まり文句で一般化し、偏見に自縛されている。無内容な紋切り型の頻出を黙認している担当編集者の怠慢は責められねばなるまい。【根拠なき断定】【無定義語の乱用】。

44 ブッダへの陳腐な個人崇拜的表現が目立つ。他の部分についての著者の公正性にも疑問を抱かせてしまう。これも、担当編集者はどうにかできなかったのだろうか。【感情に訴える議論】。

45 p.92~99 付近に龍樹(ブッダ?)の推論例として挙げられているのは、述語論理学の推論である。つまり、命題論理学としては演繹になっていない。【約束違反】。

46 比較対象として現代論理学を命題論理学に限定しておいて、ブッダにだけ述語論理学を使わせて「現代論理学を凌いでいる」と断定するのは非論理的だろう。それともまさか、p.92~99 付近のあれらを命題論理学の推論だと勘違いしている?【わら人形論法】。

47 命題論理と述語論理の区別もできない混乱に陥っているのは、抽象記号で形式化されていないからだ。形式化がされていない自称ブッダ論理学は、論理学とは認められない。【拡大解釈の誤謬】【不当表示】。

48 ブッダ物理学、ブッダ心理学などと称したとしても、推論形式に関する抽象的学問を必要とするはずである。ブッダ物理学は現代論理学と並ぶことはできず、結局は依存せざるをえないということがわかっていないようだ。【学問体系・分類の意識の欠如】。

49 以下は、本にかぎらず、掲示板などに見られる要素も含めた症状

49 誤りを認めず、誤った記述をはじめから意図していたなどという見え透いた言い逃れに終始している。【アドホックな説明】。

- 50 本当に「意図」していたとしたら、読者への裏切りである。【著者倫理違反】。
- 51 「見る」というヒューリスティックの概念に逃げ込んでしまう。【議論拒否】。
- 52 論述の基本の初歩的歪曲を指摘されても、「ブッダ論理学は異質だから西洋論理学では理解できないのは仕方ない」と話をそらす。【薫製ニシン】。
- 53 端的な間違いを指摘されても、「存在論の違い」であるかのように問題をすり替え、面子を保とうとする（学ぼうとしない）。【薫製ニシン】。
- 54 存在論が違うと論理的な議論ができなくなるというその理由を説明していない。
- 55 存在論（形而上学）が入ってくるのは述語論理学からであることを読者に隠したまま、存在論のことを言い立てている。【カテゴリーミステイク】
- 56 存在論的前提の相違にかかわらず通用する普遍的な学としての論理学の意味がわかっていない。つまり、論理学を矮小化している。【ゲリマンダー】。
- 57 前提の異なる者どうして議論を進めるための演繹定理が念頭にない。【見落とし】。
- 58 $P * Q$ は次のように変形できるという言葉が、他の発言と整合していない。
(P そして Q) (P そして $\neg Q$) ($\neg P$ そして $\neg Q$) 【矛盾】。
- 59 「命題変項」という語の使い方から、メタ論理と高階論理の区別ができていないらしい。【論点混同の誤謬】。
- 60 同一定義の概念を語る 記法の違い と、同一用語の 定義の違い との区別がわかっていないらしい。
- 61 「文として成り立つという意味でみんなが承認している」とことと、「みんなが承認していることがらを語る」とことの区別ができていない。【使用と言及の混同】。
- 62 現代論理学では、みんなに承認などされていない文も語れることが理解されていない（文かどうか一見して判定できない込み入った分子文など）。【事実の誤り】。
- 63 文として承認されていないものをブッダ論理学がどう語れるのか、実例が出ていない。
- 64 「封印」「冒涇」といったカルト語での馴れ合いが目立つ。【神秘主義】。
- 65 「水と油」だから議論する気がないということならば、現代論理学をあえて「批判」する必要はないばかりか、批判できなかったはずである。独自に形而上学を語るべきだったろう。【不必要な箔付け】【権威による議論】。
- 66 現代論理学は、理論的基盤のあるアイデアならばすべて包含する体系であることを理解せず、「現代論理学は自分の立場を脅かす考えを排除する」と思い込んでいる。（インド思想自身の排他的性格を投影しているのかもしれない）【陰謀説】。
- 67 私たちの批判の大半が、初歩の作文作法の過ちを指摘したにすぎないことをついぞ理解せず、なにやら高尚な「異質な論理学への学界の無理解」へ還元しようとしている。【薫製ニシン】【不当な誇張】。
- 68 普遍的討論の枠組みとしての内容中立的（存在論的に中立な）論理の意義を理解していないせいか（56 参照）、掲示板では、自分と同意見の書き込みを歓迎し、反対者・批判者には拒絶的になるという偏向が強い（64 参照）。議論という営みの目的がわかっていないようだ。【確証バイアス】。